対話をデザインする——伝わるとはどういうことか (1)

今、対話とは何かと考えると、どのように説明できるでしょうか。とても簡単にいえば、「相手と話すこと」ということになるでしょうか。

しかし、一方的に相手に話しかけても、その相手がこちらの言っていることに耳を傾けてくれるかどうかは、だれも保証できません。

相手の目をしっかり見て、きちんと語りかけること、巷の話し方講座等ではこんなアドバイスがあるかもしれません。そのとき、しばしば出るのは、①「思ったことを感じるままに話してはダメだ」という意見ですね。思ったことを感じるままに話すと、お互いに感情的になってしまい、解決すべきことがなかなかうまく運ばない等々。

しかし、「思ったことを感じるままに話す」ことそれ自体が悪いことだとは、わたしは決して思いません。むしろ「思ったことを感じるままに話すべき」であるとさえ思うほどです。

ただ一つ、思ったことを感じるままに話すと、それがおしゃべりになってしまうという大きな課題があります。

ここでいう「おしゃべり」とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少しむずかしくいうと、他者不在の言語活動なのです。

でも、②相手があって話をしているのだから、他者不在とはいえないのではないかという質問も出そうですね。

たしかに、おしゃべりをしているときは、相手に向かって話しかけてはいますが、ほとんどの場合、何らかの答えや返事を求めて話しているのではなく、ただ自分の知っている情報を独りよがりに話しているだけではないでしょうか。そこでは、他者としての相手の存在をほぼ無視してしゃべっているわけです。だからこそ、思ったことを感じるままに話すことには注意が必要なのです。

「あのことが、うれしい、悲しい、好きだ、嫌いだ」というように、自分の感覚や感情をそのままことばにして話していても、相手は、「へえー、そうですか」と相槌を打つだけ。今度は相手も自分の思いを語りはじめ、それぞれに感じていることや思っていることを吐き出すと、お互いなんだかすっきりして、なんとなく満足する。こういうストレス発散の点では、おしゃべりもそれなりの効果をもっていますが、その次の段階にはなかなか進めません。

このように、いわゆるおしゃべりの多くは、かなり自己完結的な世界の話ですから、そのままでは、それ以上の発展性がないのです。その意味では、おしゃべりは、相手に向かって話しているように見えても、実際は、モノローグ（独り言）に近いわけでしょう。表面的には、ある程度、やりとりは進むように見えますが、それは、対話として成立しません。ここに③モノローグであるおしゃべりと※ダイアローグとしての対話の大きな違いがあるといえます。

（細川英雄『対話をデザインする——伝わるとはどういうことか』筑摩書房　による）

※ダイアローグ…二人以上による問答、対話。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「『思ったことを感じるままに話してはダメだ』という意見」とあるが、次の文がこの意見に対する筆者の考えとなるように、解答欄（かいとうらん）に当てはまる言葉を本文中から十字で探し、書きぬきなさい。

「思ったことを感じるままに話す」こと自体は悪いことではないが、思ったことを感じるままに話すと、［　　　　　　　　　　］活動になってしまうという課題がある。

(2) ――線②「相手があって話をしている……質問も出そうですね」とあるが、この質問に対する筆者の考えとして適当なものを選びなさい。

ア 「おしゃべり」は相手に向かって話しかけているので、たしかに他者不在の活動とはいえない。

イ 「おしゃべり」は独りよがりに話しているだけで、相手の存在を無視しているので、他者不在の活動である。

ウ 「おしゃべり」によってお互いがすっきりすることもあるので、他者不在の活動ではない面もある。

［　　］

(3) ――線③「モノローグであるおしゃべり」に当てはまるものを選びなさい。

ア こちらに耳を傾けてくれるように話す。

イ 相手の答えや返事を求めるものである。

ウ 自己完結的な活動であり、発展性がない。

［　　］